



新出生前診断
の運用の注意
点などを説明
する久具宏司
教授＝甲府・
古名屋ホテル

「新出生前診断 説明が重要」

指針検討委の久具委員長、甲府で講演

運用時の注意点など解説

4月から妊婦の血液で胎児のダウン症などが高精度に分かる新出生前診断が始まったことを受け、日本産科婦人科学会で新出生前診断に関する指針を作った検討委員会委員長を務める、東邦大医療センターの久具宏司教授が7日、甲府市内で産科医らを対象に講演した。診断に際し、親への事前説明の重要性などを訴えた。

久具教授は新出生前診断について、検査時は採血だけだが、陽性結果が出た場合は羊水を調べる必要があることなど留意点を説明。「リスクの

ない夢のような検査ではない

い。カウンセリングが重要だと強調。指針を作る際のバリエーションコメントでは、賛成と反対の意見が両極の結果だったと明かし、「親の立場のほか、おなかの子の立場も考える必要がある」と話した。

現状は希望者が多く、実施病院に予約が集中していると、「報道が独り歩きし、妊婦に診断のメリット、デメリットがあまり浸透していない。妊婦に接する産科医、助産師がよく時間をかけて説明してほしい」と話した。

山梨産科婦人科学会が主催。産科医や助産師、医学生ら約100人が参加した。平田修司会長は、「県内にはまだ新出生前診断ができる医療機関はないが、将来的に導入を検討することになるだろう。現状では課題が多く、勉強しながら慎重に議論を進めた」と話した。(桑原久美子)